

日中の双方向から表現の相違をさぐる

荒川 清秀

●日本語から中国語？ 中国語から日本語？

著者の藤田昌志氏は大阪外語大（現大阪大）で中国語を修めたあと、二五年にもわたって日本語教師をしてこられた方である。その間、途中で大阪市立大学大学院に入りなおし中国語と中国文学の勉強で中断はしているものの、基本的には日本語教師としての道を歩んで来られた。本書はその藤田氏がこの二五年にわたって主に中国人を相手に日本語を教える中でぶつかった日中の表現の違いについてまとめたものである。

その表現論のもとになるのは、本書の用例からみると日本語中訳である。したがって、本書は中国人母語話者が日本語を中国語にするときにいかなる点に注意を払うべきかという観点から読むことも

できるし、また、中国語学習者にとって、中国語作文の一つのガイドとして読むこともできる。さらには、日本語と中国語の発想、構造の違いを知る書として読むこともできる。

日本人中国語学習者のための中国語作文のテキストとして評者がお世話になった本に、

『A』奥水優『やさしい中国語の作文』（大書林、一九七〇）

『B』香坂順一・宮田一郎『現代中国語作文』（光生館、一九七二）

がある。これらは中国語の文法体系に基づいた例文がまずあり、それに到達することを目ざしているように思えた。つまり、モデルとしての中国語が最初にあるのである。これに対し本書は、まず日本語があり、それを中国人がいかに中国語

藤田昌志著

日中対照表現論

付…中国語を母語とする日本語学習者の誤用について

A5判 一七四頁

白帝社「二、一〇〇円」

にしたかという仕組みをさぐることで最終的には日本語と中国語の表現の違いに迫ろうとした書と言える。もともと、この場合でも藤田氏が中国人と検討しながら対訳を考えていくという方法もある。

『C』竹島金吾・賈鳳池『中国語作文』（金星堂、一九七五）

などはその一つの見本であろう。

本書は一つの作品に一種類の翻訳しか使っていないようだが、複数の訳を比べてみることににより、より客観的な結果が得られることもある。そもそも、対訳を使う場合、その訳文の正確さ、妥当性をめぐって議論がしばしば起こるからである。

本書と逆の立場、つまり中国語文をい

かに日本語にするか、そこに表現上どのような違いがあるかをさぐったものに、

「D」 荒川清秀一九八三「中国語日訳上の問題点」(『中文日訳の諸問題』日本語と中国語対照研究会編)

「E」 今富正巳『新訂 中国語⇆日本語翻訳の要領』(光生館、初版一九七三、新版一九八八)

がある。「D」は評者が北京語言学院(現大学)の学生に「中国語日訳」の授業をする際につくったテキストである。「E」は「中国語⇆日本語」とは書いてあるものの、例文をみると、基本的には中国語を日本語に訳すときにどのようなことに留意すべきかを問題にしたものである。ある意味では藤田氏の著と逆の方向にあると言える。なお、つぎの「F」は日本語中国語双方から翻訳の機微に迫ったものである。

「F」 大原信一監修、遠藤紹徳・武吉次朗編著『新編・東方中国語講座 第四巻 翻訳篇』(東方書店、一九九〇)

●本書の構成と用語

本書の構成は以下のようになっている。

- 第一章 加訳(日⇆中)について
 - 第二章 減訳(日⇆中)について
 - 第三章 受身文(日⇆中)について
 - 第四章 転換(日⇆中)について
 - 第五章 意訳(日⇆中)について(Ⅰ)
 - 第六章 意訳(日⇆中)について(Ⅱ)
- 付…中国語を母語とする日本語学習者の誤用について

「加訳」は日本語を中国語に訳すときになんらかの語句を加えるもの。「減訳」は日本語を中国語に訳すときになんらかの語句を削るもの。第三章の「受身文」は受身文が多いと言われる日本語を中国語に訳すときのように訳されるか、訳された中国語のタイプを論じたもの。つぎの第四章「転換」は「⇆」に言われて「を」が言った」と主客を転換する現象をもつばら論じた章である。第五章と第六章は日本語を中国語に訳した際に「加訳」「減訳」「転換」以外の、別の表現に変わってしまうタイプを論じたもの。「付」

は中国人学生の(作文? 普段の会話?) 誤用例から、その間違いのパターンを採ったものである。

「意訳」「直訳」とはいうが、「加訳」「減訳」というのは一般にはあまりなじみがないだろう。しかし、これも翻訳関係者の間ではよく使われていた用語であったらしく、「E」「F」には次のようなものがあがっている。

「E」 加訳 減訳 反訳 変訳 倒訳
分訳 合訳

「F」 倒訳 おもて訳・うら訳 加訳 不訳 分訳 変訳

「倒訳」とは順序を逆にして訳す法、「ひっくりかえし」である。「反訳」は「只有「オ」を「が」してこそ」ではなく「が」しなれば」と訳す法。「変訳」とは「文の要素や品詞を変換させるもの」。他は想像がつくだろう。藤田氏がこうした翻訳の先達の用語を知っていたかどうかかわからないが、「転換」というのは藤田氏独自のものか。

しているがこれは興味深い。評者は「我
听了很高兴。」を訳するとき「それを聞いてうれしかった」と「それ」をいつもつけている。なお、日本語が指示語を好むことについては一〇七頁以下にも指摘がある。「売っている椅子」が「卖的椅子」になるのは「減訳」の例（三一、一三六頁）だが、これは「买的书」が「已然」に「卖的书」が「未然」に読まれる現象のひとつで、ここに語彙の意味がかかわっていることは史有為二〇〇〇「V的N的」体貌問題」『語法研究与探索（十）』（商務印書館）に興味深い議論がある。「いつ行くか早く知らせてください」が「请早些告诉我，您几时去。」となり「か」が消える現象を指摘している（四〇頁）。これは逆に中国人が疑問詞の入った文を日本語にするときに「か」が入ってこないことにつながる。「D」でも、您知道这是什么花？／我不知道她什么时候走的。が、中国人の日本語訳でしばしば「なんの花か」「いつ帰ったか」の「か」が抜けることを指摘した。これはかなり日本語のうまい人でもやってしまう。な

お、これについては顧海根・徐昌華一九八〇「中国入学者によく見られる誤用例」『日本語教育』四一号にも指摘がある。

また、日本語の「た」にあたる「了」が主述フレーズや動詞フレーズを目的語にとる動詞で消える現象を「減訳」の例としてあげているが、これは荒川一九八一「了」のいる時といらぬ時」（『中国語学』二二八号）に指摘がある。

「転換」のタイプには「受動者中心から動作者中心」などがあるが、九八頁にあげる「事物中心の表現（日）から動作主中心（中）」の例として「彼から電話がかかってきた↓他打来了电话（電話をかけてきた）」などは言われてみてなるほどと思った。

まだまだ紹介したいことはたくさんあるが、それは本書を直接ひもといていただくことにして、あといくつか注文を書いております。

（一）本書には「習慣的に」「言語習慣として」「語調から」という言い方が各所にみられるが、それではあまりに経験主義になってしまう。これはもつと理論

化、法則化していただきたい。（二）本書は著者のいくつかの論文がもとになっているが、本にするからには本としての一体感がなければいけない。たとえば一〇〇頁の注（三）で自分の論文を引いているが、これは本書第三章に当たるのであるから、そのページをあげるべきである。（三）中国語学や日中での日本語教育の成果にもっと気を配っていただきたい。そのいくつかはこれまでも指摘してきたが、たとえば感情表現に関しては大河内康憲一九九七「感情表現と使役構文」（『中国語の諸相』白帝社、一九九七、第九章）に論がある。また、身体に関する慣用句研究（一〇六、一一七頁）としては、王宏『日語慣用語例解手冊』（上海訳文出版社、一九八三）があり、「にとつて」と「に対して」（二九頁）は馬小兵「日語複合格助詞和漢語介詞の比較研究」（北京大学出版社、二〇〇二）がある。「冗調」が何度も出てくるが、これは「冗長」の間違いであろう。

（あらかわきよひで 愛知大学）